

ネパールってどんな国 ネパールと日本の絆を創る

東京情報大学講師 映画監督 ハテマロ会顧問
伊藤 敏朗

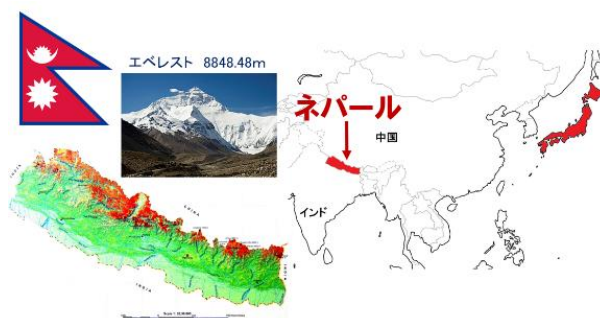
1. ネパールはどこにあるどんな国？ どんな歴史？ どんな人たち？

ネパールは中国とインドに挟まれた山国です。すごく乱暴に言えば、インド大陸のプレートがユーラシア大陸にぶつかり皺が盛り上がったのがエベレストです。プレートの狭間にある国という点では、ネパールも日本も非常に似たところがあります。

ネパールは世界で唯一、四角ではない国旗の国です。どうしてこんな形になったのか後ほどお話しします。今は直行便があり、行きで約 7 時間帰りは約 6 時間、佐倉から 5000 キロちょっとのところにあります。

歴史は長い国ですが、今の「ネパール：Nepal」という国名は実は 3 年前からです。それ以前は「ネパール連邦民主共和国：Federal Democratic Republic of Nepal」（2015 年ネパール第 2 修正憲法第 56 条）、その前は「ネパール王国：Kingdom of Nepal」（1990 年ネパール憲法第 132 条ほか）でした。連邦共和国と言い始めた時、関係者が皆「ネパールって連邦か？」という素朴な疑問を持ちました。そして、どうもネパール政府自身も連邦と名乗るのは変かなと思ったのかどうか、2020 年、やや唐突に「ネパール」というスッキリした国名を国際連合に通達し、承認されました。そして今は、比較的安定した政体になっています。国土は日本の 1/3 よりはちょっと大きく、日本の GDP に比べれば百何十分の 1 とまだ世界最貧国の一つです。

世界最高峰のエベレストを擁しつつ、一番低いインドの近くは標高 40 メートルくらいで、世界で最も標高差がある国です。ですから、世界中の気候帯が標高の都度あり、動植物の種類も非常に多いです。そして推定 3000 万人くらいが暮らしていますが、百以上の民族と言語があります。



《暮らしが息づく古都カトマンズ、懐かしさを覚える村々》

ネパールという国の名前からどんなものをイメージするか人それぞれでしょうが、なんといってもカトマンズバレー（カトマンズ渓谷あるいはカトマンズの谷・盆地）です。1979 年に世界遺産に指定されたカトマンズの中世都市の街並み、これは本当に見応えがあります。通りを歩くと、もちろんそういうふうには保存されている地区もありますが、非常に古い街が残っていて何より驚かされるのはそこで実際に暮らしているということです。博物館のようにこぢんまりと綺麗なのではなく、そこで人々の暮らしが息づいているという

ことに感動します。それと農村。本当に外国にきたというよりも日本に帰ってきたような印象です。デジャヴという言葉がありますが、自分の故郷に帰ってきた、もしかしたら自分はここで生まれたと思うような不思議な懐かしさを覚えます。日本人にとっては心が解放されるような素敵な田舎です。その山の尾根を一つ越えと言葉が通じないというくらい、いろいろな言語と民族の人たちが暮らしています。今日踊ってくださる方はバフンで、グルン族の服を着て踊るそうですが、グルン族とかタマン族は、村を歩いていると普通の日本人とすれ違っている感覚しかないです。私などに、「あんたグルンか」と呼





びかけてくる人がいるくらいで、割とアジアっぽい人たちも多いです。そういうことも懐かしさを感じる一因かもしれません。田舎の人も都会の人も、とにかく笑顔が素敵な人懐っこい皆さんです。そして子どもたちの目のキラキラしていること、これは私としても不思議ではないです。本当にネパールの子は漫画に描くように瞳の中が光っており、魅力的な心を離さない子どもたちです。

《在留ネパール人の増加とネパール料理》

日本に住むネパールの方が大変増えてきました。今やブラジルに次いで 6 位、14 万人と聞きましたが、何より増え方がすごいです。21 世紀になってから 30 倍くらい増えています。現地では日本への留学熱がますます盛んで、コロナになってあるいは円安になって、多くの国の留学生たちは水が引くように減っているのに、ネパールの人だけなにか勘違いがあるのではないかと心配になるくらい増えているのです。11 月に日本一の高さを誇る麻布台ヒルズという建物が出来ますが、あの設計チームは世界中の才能を集めて建てています。その一人は、私どもハテマロ会会長のスラズ・ブラダンです。こういう私たちの生活のかなり高いレベルに入ってきている人もいますが、皆さんの実感としては、「町のネパール料理屋が増えているな」ではないでしょうか。現実にはネパール料理とは言わず、インド料理とかエスニック・アジアン何とかと言っていますが、働いているのはネパールの方が多いです。

私はカレーみたいなのをナンにつけて食べるのが好きですが、ナンは本当はペルシャ料理だそうで、実際に現地に行くとナンは食べられません。もっと薄いお煎餅みたいなチャパティというのがあります。定番のネパール料理はダルバートといいいます。ダルというのは豆で、豆のスープとご飯を右手で混ぜて右手で食べます。そのご飯はいわゆる長粒米で、日本のほかほかのご飯を手で混ぜて食べるような真似は火傷しかねませんのでしない方がよいと思います。やはり現地のお米あるいは乾燥したチウラと混ぜ、手で食べた方が風味があって本当に美味しいです。



《通りを悠然と歩く野良牛たち》

肉は大体鶏、羊、水牛で、牛肉は絶対に現地では食べません。牛を食べないのは、牛が神様の乗り物だったというヒンズーの教えに則ったものです。ただ、日本にいるネパールの方にはあまりこだわりがない人もいます。一緒にバーベキューをやる時こちらは気遣ったつもりで牛肉は買わないでおくのですが、ネパール人から「今日はどうして牛肉ないの、次は忘れないで」と言われることもあります。一方で厳格な菜食主義の方もいます。牛は食べるのはご法度ですし、町の通りを悠々と歩いています。「あの牛は誰が飼っているのか」と聞くと、誰も飼っていない。野良牛なのです。牛肉は食べませんが、水牛の肉はたくさん食べます。ネワール族の料理では水牛の脳を食べます。世界では狂牛病がニュースになっている時、水牛とはいえ脳を出されると恐々口にしますがとても美味しいです。



2. 地域メディア活動、ハテマロハウス、そしてネパール

私が東京情報大学でメディア教育をやっていた時、力を入れていたことの 하나가 地域メディア活動です。佐倉や四街道を含め千葉県全域の地域 の話題を取り上げた番組を作り、千葉テレビなどで発信したりしていました。架空の「サクラ FM」という放送局を舞台にしたドラマを作り、全国コンクールで大賞を受賞したというようなこともありました。還暦を機に退職し印旛沼の一番突先にある家を手に入れ、映像工房ハテマロハウスと称して在日ネパール人青年の会、ハ



テマロ会の活動拠点にいただいています。佐倉の素晴らしいロケーションに憧れてこの土地に住み始めた訳ですが、本当に自然が豊かで美しい風景が残っており、何より胸を打つのは印旛沼に沈む夕日です。そして自然の教材に恵まれています。私が映像工房を開いたのは、そういう理科映像教材の宝庫であるということも大きな理由でした。一番新しい作品は日本コロムビアから出した中学校理科の映像教材ですが、日本中の中学生に佐倉を日本の原風景と感じてもらえればいいなと思っています。

地域映像活動をやっていた時に考えていたことは、ひとつは学生が地域にカメラを向けることで社会性が育成されるということ、いっぽう地元の方も自分たちの土地の魅力を再発見したり自分たちの活動の価値を認識できるということでした。そういう学生にも地域の人々にも価値ある活動が面白いなとずっと感じていました。そして映像のコミュニケーションが人々を幸福にするという私なりの仮説は世界で通用するのか試してみたいところがありました。

《「のぞきからくり」映画化の脚本、世界の映画研究者にとって穴場だったネパール》

「のぞきからくり」という祭り屋台があります。屋台に穴が空いていてそこに凸レンズが付いている。覗き込むと、中で木目込みの「種絵」という紙芝居みたいなものが上下してストーリーが進むというものです。私はこれをなんとか映画化したい、その時は佐倉をロケーションの場所にしたいと脚本を書いていましたが、のぞきからくりの屋台を再現する難しさから、すぐには着手できずにいました。そうこうするうちに、ネパール人の留学生ニラジュ君が私のゼミに入ってきて、「ネパールは映画がすごく盛んなので、ネパールで一緒に撮りましょう」とか言い始めたのです。しかしユネスコの統計では、ネパール映画はずっとゼロ。どうも統計を提出するとかまとめるということはあまり好きじゃない国民性らしいというのは、現地に行ってみてわかったことです。そういう鷹揚なところがネパールの魅力でもあるのですが、逆に言えば世界の映画研究者にとってネパールは穴場だったのです。



市川工業高校の菊池先生が率いるネパール国際技術ボランティア隊に 2006 年参加し、初めてネパールの地を踏みました。そこで外国に来たのではなく自分の故郷に帰ってきたという感じで、いったいどういう国なのだという衝撃を受けました。

《ネパールの「のぞきからくり」とガネス・マン・ラマ》



その滞在中、ホテルでテレビを見ていたら、のぞきからくりが映ったのです。「ネパールではまだのぞきからくりが現役なのか」と旅の現地コーディネーターに聞いたら「ありますよ」ということで、「それならここで映画を作りたい、一緒に作ろう」となったのです。このガネス・マン・ラマという人物は、実は旅行会社はアルバイト的に経営している映画俳優だったのです。日本に留学経験があり日本語が非常に堪能で、日本とネパールの最初の合作映画の主演俳優でした。のぞきからくりを使ったドラマを作ろうとその場で決まったのです。2006 年の 12 月に初めてネパールへ行きラマと意気投合、帰国後 2 週間くらいで、佐倉をネパールに置き換え、のぞきからくりはカトマンズでよく見かける“カタプタリ（操り人形）”に変えて脚本を作り直しました。基本的には、君の生まれた意味は何かという天啓を与えられた少年が成長し、文化財保護に取り組むという大きな骨格は変わっていません。2007 年 2 月に私にとって最初のネパール映画監督作品、ガネス・マン・ラマ主演、『カタプタリ～風の村の伝説～』（2007）の撮影を開始しました。

《『カタプタリ～風の村の伝説～』メイキング動画》



撮影は毎日大変でしたが、撮影が終わりエキストラで集まっていた人たちにお菓子を配ってあげたと言うと、自然に歌声が湧き上がり踊り始めるのです。不思議な充実感と幸福感の連続で夢を見ているような撮影期間でした。ネパール人は、映画が好きですが映画の撮影を見るのも大好きです。撮影をしていると、ものすごい人垣ができ、いつまでも楽しんで見ていてくれます。映画を撮る時は政府の許可を得ますが、その許可証があれば、どこでも撮影ができます。街の目抜き通りに撮影

隊が行き、そこにいる人たちをいきなりエキストラに使うのです。バイクが通りかかったら、それを加えてしまう。ギャラは払わないのですが。3 本目の映画の時には、交通整理をしているお巡りさんに「こういうセリフを言ってくれ」と頼んだら喜んでやってくれました。



『カタプタリ』の脚本で、主人公のおばあさんが死の床にあり、シナリオではその場に薬が置いてあるとしていたら、スタッフから、こんな村で医者にかかったり薬が出てきたりするはずはないと言われ、祈祷師が出てくることになりました。本物の村の祈祷師が出演してくれ、太鼓をどんどんどんどん打ち鳴らし始めました。

現地に行って、現地の人に教えてもらいながら、骨格だけ残してほぼネパール映画になりました。話は毎日毎日変わっていき、非常にネパールテイストになったというか、私が感じたネパールの魅力をたくさん詰め込んだ映画として完成することができました。現地メディアも非常に好意的な評価が多く、著名な評論家からもラジオで褒められたのですが、この評論家は、「これほどネパール的な映画を日本人に撮られてネパールの監督たちは何をしているのか」と怒りだしたので、これには非常に恐縮しました。



た。しかしある意味外国人がやる行為として、現地に対しリスペクトを抱きその価値を発信していく、つまり私がこの千葉で行っていた地域メディア活動というものをこういう形で拡大することは、必ずしも間違っていないと確信できた時でした。この映画でネパール政府国家映画賞と賞金をいただきましたが、何より大きかったのは第2作の監督オファーが来たことです。

3. ネパールの古代・中世・近代

今日のもう一つのテーマ、ネパールの歴史です。ネパールの歴史で特筆すべきは、お釈迦様は紀元前6世紀頃に現在のネパールのルンビニで生まれた方ということです。日本人のイメージではインドで生まれた仏教ですが、ネパールの誇りとしてこれは申し上げておきたいと思います。

ヒマラヤの雪解け水が溜まったカーリーフラダ（蛇の湖）という美しい大きな湖を、文殊師利が山を剣で切り湖水を排出させ、カトマンズの大地ができたというのが開闢伝説ですが、地質学的にも、約6000年前に古カトマンズ湖の南縁部が活断層の影響で切れ、1000年かけて湖水が排水されカトマンズ盆地が出現したことが判っています。6000年も前から誰が見ていて、そういう神話、伝説になったというのかわかりませんが、素敵な話だと思います。

《三王国時代にネワール族の文化が開花》

ここに7世紀までリッチャビ朝、その後デーヴァ朝、マッラ朝といったいくつかの王朝が出来ました。その間、4世紀頃から各地で今も残るお寺が出来上がり、パシュパティナートのような大きな建築物が作られます。このカトマンズの大きさに、無理やり似た縮尺で東京を重ねてみると、皇居のあたりが王宮で、新宿より先はもう山です。浦安あたりにもう一つ大きなバクタプルという都があります。15世紀半ば日本の室町時代に、マッラ朝がバクタプル（旧くはバドガウンといった）、カトマンズ（同カンティプル）、パタン（同ラリトプル）の三王国に分かれます。この三王国時代に、ネワール族の文化が見事に花開き多くの建築物が今も残っています。



バクタプル



カトマンズ



パタン

《ゴルカ王国の抬頭・ネパール統一と勇猛果敢なグルカ兵》



初代ネパール王
プリトビ・ナラヤン・シャハ王



現在のネパール国境

その後、周辺に小国が出来てきて三王国の力が弱まり、18 世紀後半にカトマンズから西に 70 キロ余りの**ゴルカ王国**がネパールを統一します。割と小さな王国ですが、戦が上手く勇猛果敢なプリトビ・ナラヤン・シャハ初代ネパール王が三王国を滅ぼし国家統一を果たします。さらに、チベットや清と戦い、どんどん領土を拡張していきます。最盛期には、グレートネパールと言われるこの王国は、現在の国土の**約 1.5 倍**を有して

いました。ちなみに、あのモンゴル大帝国の影響もネパールはほとんど受けていません。やはり騎馬民族はヒマヒヤを越えられなかったということだと思います。

そういう中、イギリスの東インド会社が度重なる交渉の末に迫ってきます。1814 年からのグルカ（ゴルカの英語訛り）戦争と言われているものです。さすがにイギリスにはかなわず、最後の停戦の時に現在の国土くらいまで押し込められてしまいます。その時にネパールは、インド平原の部分やダージリンと言われる地方を国土としては失います。ただネパール人の心の中には、このグレートネパールの版図が割とくっきり残っており、自分たちはモンゴルに征服されなかった、長い歴史を通じて一度も外国に征服されたことのない国だという強い矜持と誇りを持っています。

イギリス軍も、グルカの兵隊たちが勇猛果敢で強いことをよく認識していました。カトマンズの近くまで攻め込み停戦し折り合ってから、むしろイギリスとしてはこの強いグルカ兵たちを逆にイギリス軍の傭兵として使う契機となった訳です。そしてグルカ兵は、アフガニスタンやフォークランド戦争で名を馳せる傭兵部隊となり、今でも世界中にいます。



日本とネパールは国として戦争したことはありませんが、日本軍のビルマ戦線（インパール作戦など）ではグルカ兵と戦っています。日本兵にとっても恐怖の的でしたし、グルカの人たちにとってもこの戦争は非常に苦しいものだったのです。話は、私の 2 本目の監督作品、ガネス・マン・ラマ主演、『カトマンズに散る花～シリスコフル～』（2013）に入っていきます。

4. パリジャートの『シリスコフル』



ネパールの国民的女流作家でパリジャートという方が書いた『シリスコフル（シリスの花）』というグルカ兵を主人公にした文芸小説（1964）があります。戦争に行き日本兵との戦いで傷つきボロボロになった年配の元グルカ兵・スヨグビルと、貴族の館で耽溺的に過ごす口は悪いけれどすごく惹きつける力を持った女性・サカンバリとの奇妙な恋愛物語です。その館には長男と 3 人の美女姉妹がおり、この女たちがいろいろからかって主人公を惑わします。そこに哲学的な議論が重なってもものすごく難しい

原作です。ネパールの方も読んでもよく分からないけれどすごいと皆口を揃えます。この世界観がすごい、この言葉がすごいと。そして最後に突如人生が断ち切られるように物語が終わるのですが、こんな映画が出来上がりました。

《『カトマンズに散る花～シリスコフル～』予告編》



スヨグビル
元英軍傭兵
日本軍と戦い
精神的後遺症



サカンバリ
耽溺的な謎の女

次女 サカンバリ



三女 サス



長女 ムジュラ



長男 シブラージュ

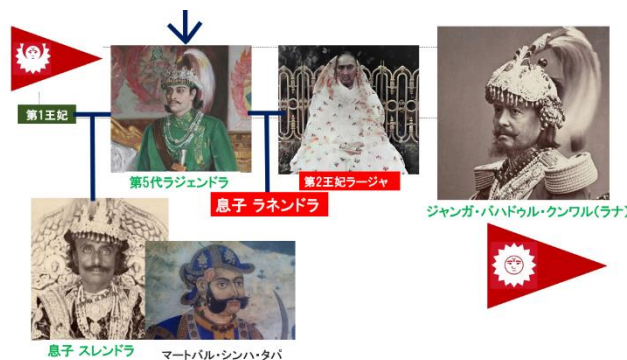
なかなか話が難しい上に突如終わる原作なのです。そのまま映画にしても多分誰も分からないだろうと、私が 15 分ほどの後日譚を足したのですが、これが原作の版權を保持しているパリジャート財団と議論になりました。結局ネパールで公開する際は、まず原作通りにいったん終わった感じになったところに小さな字幕で、ここから先は監督の解釈であるという注記をつけました。ネパールの割とインテリの人たちが口を揃えて、「あなたの映画を見て初めて話が分かった」と言われ、余計なことをしたという感じもありますが、悪くもなかったかなと思います。

撮影ではここはスタジオ、ここはこの家、これは別の家と細かくカットを割り、いろいろなところでロケーションしたのを編集し、1960年代のカトマンズの街並みを映像で再現することができました。この映画はネパール政府国家映画賞の撮影賞を受賞（撮影ガウリ・シャンカ・ドゥンズーン）しました。カトマンズの 12 の映画館で公開されましたが、目抜き通りを車で走ると自分の映画のバナーが大きく出ており、一夜にして大監督になったかのような気分を味わえました。



5. ネパールの近代・現代

さてその後のネパール王国の歴史はいろいろな出来事がありドラマチックで面白いのですが、第5代ラジェンドラ国王の時代です。この人はかなり懦弱な王で、第一王妃との間にはスレンドラという息子がいました。この息子がまた非常に国民の評判が悪く、しばしば国民が国王に対して反対の声をあげることが多かったため、ラジェンドラは第二王妃のラージャ・ラクシュミ・デビーに全権を委譲してしまいます。ラージャとの間にはラネンドラという息子がおり、ラージャは自分の息子を王位に就けたいと考えます。いろいろ画策しますが、スレンドラの近くにはマートバル・シンハ・タパという側近がおりなかなか手が出せない。そこで、自分の側近であるジャンガ・バハドゥル・クンワルという将軍にタパを暗殺させます。そうすると当然仕返しがあり、それに対し更に仕返しをします。遂に 1846 年、“コート（宮殿中庭）の大虐殺”でクンワルは反対勢力を一掃してしまいます。残る障害はスレンドラのみ。ラージャはクンワルにスレンドラの暗殺を指示しますが、断られてしまいます。怒ったラージャは、こんどはクンワルの毒殺を試みるも露見して失敗。逆にクンワルがラジェンドラ国王、ラージャ王妃とその息子ラネンドラを次々に追放、スレンドラだけが残されました。ここでクンワルは自分が王にとってかわることはせず、スレンドラを王に祀り上げ、自分は宰相として実権を握る道を選び、“ラナ”という不思議な名前を名乗ります。



《三角形が二つのネパール国旗》

それまでゴルカ王国の紋章は、三角旗に月に顔のマークでした。なぜ三角かというと、風の強いところでは、四角より三角の方が見栄よくはためくのです。この三角形を使って新しい旗を作るのですが、上にシャハ王家の象徴である月に顔、下にラナ将軍家（宰相家）の紋章である太陽に顔を配しました。シャハ王家を支えるという形を取りつつ、実際は王をどんどん懦弱にします。気の利いた息子の叛乱は潰し、そうでない息子たちは子供の時から酒色におぼれさせたのです。

現在のネパール国旗の説明としては、三角はヒマラヤの山並み、赤はしゃくなげ、青は平和、月と太陽はヒンズー教と仏教の調和を象徴しているとなっていますが、このように世界で唯一の二重三角形の国旗にはまさに二重権力というか形骸権力の象徴のような意匠が実はあって、歴史的に見ると大変面白いデザインではないかと思います。



《映画興行の制限と最初のネパール映画》

このラナ家の支配は、第二次世界大戦の後、日本の徳川将軍家の大政奉還と同じようにして終わりを告げます。それまではインドを支配するイギリスの庇護の下、結構うまくやっていました。別に操られていたのではなく、いわばウィンウィンの関係でした。なので、戦後インドが独立してイギリスが引き上げるともたなくなった訳です。それまでの間はラナ家の専制でした。

映画は 19 世紀末に生まれ 20 世紀になって世界に広がっていきますが、ネパールではその最初の 50 年間は、王宮でラナ家たちだけが映画鑑賞を楽しんでいました。ごく一部の例外を除いて国民には見せなかったのです。なぜかという、外国の映画に触れることで、世界はこんなに近代化している、民主化している、人々が生き生き暮らしている、自由に恋愛しているのだということをネパールの人々に知られたくなかったのです。そういう意味ではラナ家は映画の力をよく分かっていたと言えます。

インドからイギリスが引き上げる頃、インドにいたネパール人が初めてネパール語で映画を作りました。『サッチャ・ハリスチャンドラ(偉大なるハリスチャンドラ王)』(1951) というネパール語による初めての映画なのですが、ほとんどのネパール人は見たことがない幻の映画です。

《国王クーデタとパンチャーヤト制》

1951 年、前年にインドに亡命したトリビュバン国王が帰国して王政復古がはたされ、立憲君主制となります。トリビュバン国王は割と早く亡くなり、1955 年、息子のマヘンドラ国王が即位しましたが、いろいろな勢力が敵対し国の中がまとまりません。そこで、国王自身によるクーデタ“国王クーデタ”が起きます。権力を国王に集中し政党を解散してしまいます。新憲法を作り、パンチャーヤト制というものでこれからのネパールを治めると宣言します。この新憲法を作った 1962 年に、それまでのネパール国旗から顔の部分だけを取り去り現在のネパール国旗になりました。

パンチャーヤト制はなかなか理解しにくいのですが、5 人会議（パンチは 5、ヤトは会議の意味）というのが村々にでき、その村の様々な政策を決めていく、村の 5 人の上には郡の 5 人、郡の 5 人の上に県、更にその上という王の統制下非常に複雑な間接民主制といえるものです。これである程度国の中が落ち着きます。このパンチャーヤト制をどう評価するかというのはこれからでしょうが、必ずしも総スキャンを喰らっていた訳ではないようです。ただ今の目から見れば、国王独裁の体制であったと思われます。そして 1990 年にジャナ・アンドランという民主化運動が起こりパンチャーヤト制は終焉を迎えます。

《国産第 1 号映画『アマ』とチャイティア・デビ》

最初のネパール語映画『サッチャ・ハリスチャンドラ』は、今もってどこにあるか分かりませんが、国策によって作られた最初の映画は、『アマ(母)』(1965) です。敢えて言うと、労働党礼賛の北朝鮮映画とでもいった感じのかなり露骨なプロパガンダ映画です。この映画が公式の国産映画第 1 号というわけです。映画史としてはたいへん遅く、ネパール映画が世界の映画研究者に知られていなかったのも不思議ではないと思います。



この『アマ』で母親役を演じたのがチャイティア・デビという当時まだ 14 歳の女優で、その後モスクワに映画留学をしました。帰国後、『クマリ (少女神)』(1977) という映画に主演したり、ほかの映画で助監督を務めたり、ネパール映画界に非常に功績のあった人です。この人が日本人と結婚し千葉の茂原に住んでいると知り、非常に詳しくネパール映画の黎明期について日本語で聞き取りをすることができました。ネパール人にとっては幻の大女優のような存在ですが、その縁で私の 3 本目の映画で何十年振りかでスクリーンに登場してもらうことにもなりました。この人にいろいろ教えてもらって、私のネパール研究がまとまったと言っても過言ではありません。

《プラチャンダの共産党》

ネパールのメディア史は細かく見ていくといろいろ面白いです。そもそもテレビ放送の開始も 1985 年とすごく遅く、VTR の普及の方が早いのです。VTR が許可制になると、金持ちが世界中のソフトを

輸入して有料の私設映画館を開きました。ネパールの人々はそのではじめて世界の映画に触れたのです。

1990年、民主化・反政府運動が盛り上がるなか、身分は高いけれど貧困な家庭で育ったプラチャンダことプシュパ・カマル・ダハルという人が、ネパール共産党毛沢東主義派(マオイスト)を率い、ネパール人民解放軍と政府軍との間で内戦状態に突入します。

《“ネパール王族殺害事件”、内戦》

内戦さなかの2001年、とんでもない事件が王宮で起こります。ナラヤンヒティ宮殿で王族の食事会をしようとした際、ビレンドラ国王の息子ディペンドラ皇太子が国王、王妃、弟妹をはじめ9名を銃殺した“ネパール王族殺害事件”です。皇太子はなぜそんなことをしたのか？好きな女性との結婚を反対されたから、裏で誰かが糸を引いていたとか諸説ありますが分かりません。皇太子は自殺を図りますが死にきれず、意識不明の重態のまま国王に即位し3日後に亡くなります。その結果、ビレンドラ国王の弟ギャネンドラが国王となりますが、この人は開明的だった兄とは逆に権威を振りかざすような独裁的政策で混乱を加速します。立憲君主制そのものがもうダメだと国民も思うようになっていきました。

10年に渡る内戦では1万人以上が犠牲になったと言われていますが、2006年11月、包括和平協定が結ばれ内戦は終結します。その1ヶ月後に私は初めてカトマンズを訪れたのですが、それまで内戦をしていた国という荒んだ印象はあまり受けませんでした。

マオイストを率いたプシュパ・カマル・ダハルは、内戦終結後に首相になった途端、親族を身崩しするなどして評判を落としその座を降ります。しかし、非常に知的で洞察力の深い政治家ともいわれ、現在は首相に返り咲いています。その意味ではネパールは共産党政権の国なのかもしれませんが、関係者は口を揃えて「ネパールはおよそ共産国ではない、せいぜい社会民主主義、実情はまったく資本主義」と言います。

6. マサラ・ムービーと『マイラブ』、ネパール大地震と『カトマンズの約束』

ネパール映画を一言で言えば、“マサラ・ムービー”です。マサラは香辛料という意味で、歌・踊り・ロマンス・アクション・道化がなくてはならないという決まり事です。話が何であれ、この5つの要素が入っていなければ映画として認めないのです。これはインドのヒンズー芸能の芝居綱要「ナーティア・シャーストラ」が定めるテーゼに拠っており、神様の前で演じるものの中には、必ずこういう要素が入っていなければならないというのを映画に 응용している訳です。従って、どの映画を見ても話はよく似ていますが、よく見るとこれはネパールらしいというところもたくさんあります。ちょっとだけ紹介します。

《典型的なマサラ・ムービー》

『チノ(証)』(1981): 大人しそうな女性が、突如スイッチが入ったように目をむいて怒るといのは、日本人の私からするとすごく振りが大きすぎる印象を持ちます。しかしネパールの神様というの、ある瞬間スイッチが入ると相が変わります。例えばシバ神は、ある時は踊りの相を見せ華麗に舞い、ある時は怒って目をひんむきカーラ・バイラブとなって首をはねます。実は極端から極端ということではなく、ネパールの神話世界での神様の心の動きとネパール映画の表現には通じるものがあると考えようになりました。



『ダッチナ(供えもの)』(1994): 子供の頃に育ててもらった尊敬する恩師が自分の警察署を訪ねてきたものの会えなかった警察署長が、帰っていった恩師の足跡の砂を拾い額にこすりつけるのです。恩師に対する敬慕の情をそういうアクションで描くのです。ネパールからの留学生の例も含め、ネパール文化にはそういうものがあるのだなと感じました。

皆さんもネパールに行かれたら、ぜひ映画館でネパール映画を見てみてください。私が通い始めた頃の映画館の中の熱狂はすごかったです。最前列の人は立ち上がって踊り、映画の見所になると歌舞伎のようなやじを飛ばします。決め台詞の後に時間的な隙間があるように編集し、観客の掛け声のための間をつくるのです。最新の映画館では、全席マッサージ機能付きのリク

ライニングシートというところもあります。その映画館では上映中に食事を注文して、映画を見ながらディナーが出来るのです。そういう雑然とした中でも面白い映画は面白い。日本の映画館の静寂の中での鑑賞スタイルとは大違いです。

《『マイラブ』のクランクインとネパール大地震・日本の国際緊急援助隊の貢献》

「映画館の中の喧騒をものとしめない、歌って踊ってアクションがある映画を伊藤さんも作れなきゃまだまだだよ」と言われて、途方に暮れながらも第3作となる『マイラブ』というタイトルの映画をマサラ・ムービーとして、またまたガネス・マン・ラマ主演でクランクインしたのですが、そんな中でした。2015年4月25日ネパール大地震が起きたのです。

当然撮影は中断しましたが、この時にガネス・マン・ラマがやったことがすごかったのです。彼はもともと JICA など日本の支援による現地での仕事の事実上のマネージャーのようなことをやっていた。この震災の時には、現地に駆けつけた日本の国際緊急援助隊の大きな力になって、自衛官の隊長に大変感謝され、民間人でただ一人、メダルを授与されました。日本の援助隊は現地で高く評価され、他国の援助隊が帰国する中最後まで活動を続け、一気に日本の株が上がりました。こういう積み重ねが、今ネパールで日本人気が冷めない大きな信頼感となっているのは間違いないと思います。



《おばあさんの言葉》

なんとかラマの活躍を映画に残せないかと考えている中、第1作の『カタプタリ』を撮影に行ったバタセドラという綺麗な村がこの地震ですっかり崩れてしまい、お見舞いに行きました。村の人たちはさぞ悲嘆に暮れているだろうと私は思ったのですが、亡くなった人がいなかったことなのでしょう、意外に元気なのです。私が「この美しい村が消えてしまってもとても残念です」とお見舞いを言ったら、おばあさんからびっくりすることを言われました。その時の千葉テレビのニュースをご覧ください。

《千葉TV「NEWS21」2015年9月3日放映》



「家は壊れてしまったけれどあなたの映画の中に残っている」と言われたのです。多分字の読み書きもおぼつかないような田舎のおばあさんからこれほど素敵な言葉をかけてもらい、私は泣きそうになりました。映画とはやはり人の心を支えるものなのだという強い感動を覚えました。

ちょっと話を変えて、ネパールの人は、誰かが困っている時に自分に頼ってくれと嬉しいのですが、頼ってくれないと悲しいのです。近くの人との消しゴムの貸し借り、路上でエンコしたクルマの後押し、そういう人々の心の動き方を現地で体験すると、とても感動します。

《『カトマンズの約束』完成》

そして、ラマを主人公にガールフレンドとの物語を途中まで描いていた第3作を、そこで地震が起こったということにして続きを撮っていったのです。シナリオなどはありません。がれきの上で即興で、とにかくぐちゃぐちゃになった街を撮影できるのは今しかないと撮っていききました。そうは言っても、東日本大震災を経験した我々としては、被災者にカメラを向けることはとてもできません。当然ネパールでも私はかなり躊躇しました。ところがネパールの人々にはそんな遠慮は無用というか問題ないというか、「自分の家がせっかく倒れたから撮ってくれ」といった感じなのです。しっかり撮って供養してくれとでもいうような。いろんな人が出演させてくれと、登場人物がどんどん増えました。日本とネパールという震災国同士の絆をこういう時にこそ映画に残すことも意義があるのではないかな。いろいろ



るな要因が私に押し寄せてきて作り上げてしまったという感があります。

この日本とネパールの震災国同士の絆という訴えは、ネパール政府にも届きましたし、日本で支援活動をした人たちや日本の消防関係者の心にも響いたようです。千葉市消防局さんに、日本の国際緊急援助隊の活躍を描いた映画なのでヘリコプターを出してもらえないかとお願いしたところ、意気に感じて全面協力してくださいました。そういう皆様のご支援とご理解によって、私としては“マサラムービーを”と期待されてちょっと渋々だった乗りかけの船が、大スペクタクル映画に変貌して完成したのが第3作目『カトマンズの約束』（2018）でした。

《『カトマンズの約束』 予告編》

7. 日本とネパールの文化に共通するもの

ここに至るまでのネパールの人々との出会いの中で、その深い精神性あるいは文芸性、意気に感じて動く行動原理といった非常に熱いものを様々感じました。

ところで、この映画の中では、諏訪の御柱祭と非常によく似た現地の祭りが出てきます。それとはちょっと違いますが、千葉県横芝光町に鬼来迎という重要無形民俗文化財で鎌倉時代から伝わる仮面狂言があります。ネパールにも全く同じ意匠の仮面をつけての踊りがあります。鎌倉以前からどうしてどういう経路かは分かりませんが、日本に伝わってきていたのだなと深く実感しました。ネパールの街を歩いていてなんだか懐かしいと思わせる大きな原因も、私たちの文化の源に何か通底するものがあるからという以外に言いようがありません。ストゥーパというのは元々賽の河原に石を積むという行為が大きくなってあの形になっている訳ですが、これが卒塔婆の語源となっています。あるいはネパールの街を歩いていると、たくさんのお地蔵さんというか仏様がおわしますが、ああいうのも私たちにとっては非常に身近な文化です。子供たちの育て方、可愛がり方も意識として非常に似ています。ドラえもんは実はとても仏教的で“子守り地蔵”であると解釈している人がいますが、なんとなく腑に落ちるところもあります。日本とネパールに強く共通する何かを感じるのです。おそらくはそういうご縁によって、いま日本とネパールは急接近している、ネパールの人たちも日本に興味を持ってくれて、私たちの親しい隣人になりつつあるのではないかと思います。



【質疑応答】

Q 今、土浮に在住されているとのことですが、何かご縁があったのでしょうか。

A 「草ぶえの丘」まではよく来ていて、あの辺りのロケーションは素晴らしいと前々から思っていました。ああいう場所で住宅が売りに出されることはなかなかありませんでした。しかし仲介してくれる人もおり、古民家を分けてもらえました。私が惹かれたということが大きいですが、やはりご縁があったのだと思います。CMディレクターになった私の教え子がロケをしたり、蛹や芋虫を飼育して理科教材を制作したり、私のゼミの学生たちが合宿したり、ネパールの人が泊りに来たりとか、いろいろな交流の場となっています。野鳥の森にも近く、最近はイノシシとかもよくやってきます。

Q ネパールというとヒマラヤのイメージですが、現地の人と山との関係はどのようなのでしょうか。

A まずシェルパという言葉が世界の言葉になったように、西欧などの登山家のサポートを生業としている人たちがいます。当然山岳ツーリズム、広い意味での観光業にとって山は大切な資源であると考えていると思います。ただ、ネパールの人でスポーツとしての山登りが好きだというのは、あまり聞いたことはありません。むしろ山は神様がいらっしゃる場所で、遠くから崇める信仰の対象としては非常に深いものがあると思います。

Q 内戦は何年間くらい続いたのでしょうか。

A 終わりは2006年11月の包括和平協定とはっきりしているのですが、いつ始まったのかを1996年のプラチャンダの宣戦布告宣言とすれば10年続いた内戦だったと言えます。ただ、我々は戦争という
と敵と味方が対峙して撃ち合う戦争を思い浮かべますが、証言を聞くとそういうものではなかったよう
です。蜂起した人々が、あちらこちらの村から数千人が集まり、地方政府の派出所みたいなところを一
夜にして取り囲むのです。そして国軍の兵士を引きずり出して反省の弁を述べさせた上で処刑するとい
った、ドンパチ的な戦争とはちょっと違う様相を呈していたようです。悲惨な戦争であったことは事実
ですが、敵味方が判然としないようなところもあったようです。ある日「今日からは新しいリーダーを
いただいてこの村は人民戦線の側にしましょう」、するとその村はそうなるのです。極端に言うと、カト
マンズや一部の都市以外のほとんどがそうになりました。戦闘の結果としての土地の取り合いではなく、
仕組み・制度として拡大していったと私は思っています。

注1：本稿は佐倉市国際文化大学事務局による講演書き起こしに、伊藤敏朗が加筆したものです。

注2：ネパールの歴史は主に佐伯和彦著『ネパール全史（世界歴史叢書）』明石書店刊（2003）、ネパール映画史は主に
伊藤敏朗著『ネパール映画の全貌』凱風社刊（2011）に拠ります。

注3：写真の「ダルバート」「野良牛」は菊池貞介氏提供、「クマリ」はチャイティア・デビ氏提供、「グルカ兵」はゴル
カ博物館提供、国王やパリジャートらの肖像画・写真はWikipedia（英語版）より転載、その他は伊藤敏朗撮影。

伊藤 敏朗（いとう としあき）先生のプロフィール

1957年生。東京農大卒、日大大学院博士課程修了、佐倉市土浮在住、映画監督、博士（芸術学）。

東京情報大学（千葉市若葉区）教授ほかを歴任。

ネパールにて、映画『カタブタリ〜風の村の伝説〜』（2008）、『カトマンズに散る花：Shirish ko Phool』（2012）、『カト
マンズの約束』（2017）を監督。2008年ネパール政府国家映画賞、2019年ネパール政府特別貢献賞ほかを受賞。著書『ネ
パール映画の全貌 その歴史と分析』凱風社刊（2011）。

2019年『カトマンズ三部作—伊藤敏朗監督ネパール映画作品集（DVD,Blu-ray）』がアマゾン・ジャパンより発売。

現在、東京情報大学講師。佐倉市土浮にて映像工房・宿泊研修施設「ハテマロハウス」を主宰。

最近作に『啓林館教科書準拠中学校理科』日本コロムビア刊（2021）など。

民族舞踊を披露するネパール出身で佐倉市在住のサルマ・スプリヤさん（高校2年生）

